

理念的なものはいかに教えられるのか

—概念理論をめぐる初期ベンヤミンの現象学研究を手がかりに—

浅井 健介

1. 序

本稿の目的は、1910年代後半から1920年代前半にかけてヴァルター・ベンヤミン(1892-1940)が新カント派および初期現象学派からの影響のもとに行なった哲学的研究の思想史的な検討を通じて、理念を感性的な経験によって歪めることなく提示するという青年期ベンヤミンの教育論の背後に見られる困難な課題が哲学的に深められてゆく過程を明らかにすることである。とりわけ1925年の『ドイツ悲劇の根源』の序説で打ち出された「星座＝布置としての理念」という構想を、当時の経験論や心理学主義との対決を背景に行なわれた彼の概念理論についての研究を手がかりに再読することで、その問いへの認識論的な応答を試みる。

青年期のベンヤミンは、改革教育論者のグスタフ・ヴィネケンの影響のもと、青年運動や学校改革運動に積極的に携わっていた。しかし、彼を含めたヴィネケン派の教育論は非常に観念的なものと受け取られており、しばしば現実の生活との紐帯を欠いた抽象的なものとして批判されることになった。ところがベンヤミンは、このような批判に曝されつつも、むしろ教育が目指す「理念」や「精神」を現実世界の関心から徹底的に遠ざけて純化しようという考えを強めてゆく(cf. 小林 2015)。人間の「生活や活動をただ知性のみを通じて受け取」ろうとするかのように映ったこうした彼の姿勢は周囲からの十分な理解を得られず¹、結局彼は第一次世界大戦を機に、当時の青年運動や学校改革運動との一切のつながりを断つことになる。

本稿にとって重要であるのは、ベンヤミンが周囲から、その純粋な理念と現実世界との関連を示すように求められつつも、その理念を現実世界における特定の関心と結びつけることを徹底的に拒否していたという点である。しかしそれが意味しているのは、ベンヤミンの思考がたんに抽象的・観念的な机上の理論にとどまっていたということでも、彼がそうした理念の教育を放棄していたということでもない。たとえその構想が不十分なものであったとしても、青年期のベンヤミンは「若さ＝青年〔Jugend〕」という理念を掲げることにより、青年たちの具体的な知覚や感情のうちに普遍的な理念を示そうと試みていたのである。

しかし、現実世界の特定の関心との連関から遮断されているにもかかわらず、いかにしてある理念が具体的に示されたり教えられたりされうるのだろうか。青年期ベンヤミンは、自身の教育論の背後にあるこうした認識論的な問題に対して十分な哲学的基礎づけを与えないままであった。それに対して、青年運動から離脱した1915年以降のベンヤミンはこうした問題への哲学的な掘り下げを行なっている。普遍的なものと抽象的なものとを混同する広く見られる傾向に異

を唱えていたこの時期の彼は²、新カント派やフッサール現象学派の影響のもと、普遍的な理念について、それが非個体的・非経験的であるにもかかわらずなお具体的でありうるということを認識論的に示そうと試みていたのである。本稿では、『ドイツ悲劇の根源』の序説における「星座＝布置としての理念」という構想に結実していくことになるこのような初期ベンヤミンの試みに光を当てることにより、理念的なものはいかに具体的な形で示されるのかという教育学的問題に対する一つの認識論的な応答を試みる。

以下では、まず出発点として、ベンヤミンの「星座＝布置としての理念」という構想のうちに「表象における直観可能性の確保」（今井 2012: 210）という教育学的課題を読み取った今井康雄の論を参照し、その妥当性について検証する（第2節）。今井の議論は上述のベンヤミンの問いをコメニウスに始まるより大きな教育学的文脈のなかに位置づけることを可能にする一方で、感性的なものと理念的なものを媒介するメディア理論（＝媒質論）という観点からベンヤミンの思想を読解するために、理念を感性的・経験的な現実認識から切り離そうとする青年期以来のベンヤミンの関心が後景に退いてしまう。それは他のベンヤミン研究にも見られる傾向であるが、その背後には 1910 年代後半に顕著に見られる新カント派のカッシーラーやフッサール現象学派からのベンヤミンへの影響に対する過小評価があると考えられる（第3節）。したがって、その影響について検証するために、カッシーラー『実体概念と関数概念』（1910）における概念形成論（3-1）および、現象学者であるパウル・リンケと心理学者・哲学者のテオドル・エルゼンハンスの間で繰り広げられた非経験的な本質記述の可能性をめぐる論争（3-2）について確認し、その上で、リンケの論文に応答したベンヤミンの遺稿「エイドスと概念」（1917）の読解を行なう（4-1）。そしてこの論文で提起された単独的な対象を捉える概念と普遍的な理念という区別に基づいて「星座＝布置としての理念」という構想を再読することで、感性的な経験から切り離された理念がいかにして現実世界のなかで具体的に示されるのかという問題に改めて応答し（4-2）、このベンヤミンの構想の教育学的な意義について示唆する。

2. 教育における「表象」問題とベンヤミンの「理念」論

本節ではまず、ベンヤミンの「星座＝布置としての理念」という構想のうちに「表象における直観可能性の確保」（今井 2012: 210）という教育学的課題を読み取る今井康雄による論を参照することにより、序で青年期ベンヤミンの教育論の背後にあると指摘した理念の教育に関する問題をより大きな教育学的文脈の中に位置づけることから始めたい。

今井は、ドイツの教育学者であるクラウス・モレンハウアーの議論に倣いつつ、教育における「表象の困難」（206）というコメニウスの時代に遡ることのできるような問題を提起する。例えば三十年戦争などにより荒廃してゆく世界を前にしていたコメニウスにとっては、キリスト教的観念によって世界に正しい秩序を回復させることが問題であった。しかし、書物などを通じてそうした抽象的観念を表象し伝達したとしても、それを自らの生活と結びつけることができない学び手はもはやそれを学ぶ動機をもちえない。教育におけるこのような「表象の困難」を、コメニウスの絵入り教科書『世界図絵』は図像を利用することにより解決しようとする。

「図像は感覚知覚に直接訴えることができるがゆえに、直観可能性を保証し、したがってまた自然な動機付けを可能に」してくれるのである（207）。

ところで今井は、この直観性をもった表象としての「図像の教育学的機能」を浮き立たせるために、それが、直観性をもたない「記号論的な表象」とは別のメカニズムをもつのだということ強調する (209)。その際、彼が「記号論的な表象」の特徴を典型的に示すものとして引用するのは、カッシーラーの『シンボル形式の哲学』のなかの次の一節である。

記号のこの定立によって、意識は感覚や感性的直観という直接的基体からますます離れてゆく。(……)／おそらくこの傾向がもっとも明確にあらわれているのは、科学的記号体系の機能においてであろう。特定の元素を示すものとして用いられている抽象的な「化学式」は、直接の観察や感性的知覚がその元素についてわれわれに教えてくれるようなものはもはや少しも含んでいない。(……)化学式は(……)その物体を、一般的法則で規定されている可能的「反応」、可能的因果関係の総体として捉えるのである。(Cassirer 1923: 44f.=85f、引用は今井 2012: 208 から。省略は今井、傍点はカッシーラー。)

今井が着目するのは、「化学式」に代表される記号論的表象が、「感性的直観」と相容れない関係にあるとされている点である。今井はこの一節を受けて、「記号論的表象は、それが直観可能性を確保しえないがゆえに教育の観点から見れば不十分」(今井 2012: 208)だと述べるが、その際に想定されているのは、「化学式」を前にしてもそれを自分たちの現実世界における感覚知覚と結びつけることのできないまま勉強嫌いになる子供たちの姿かもしれない。それに対して、図像が教育学的機能をもつのは、今井が引用しているモレンハウアーの言葉に従えば、それが「直接的な感覚知覚と、この知覚がそのなかで初めて意味を受け取る秩序との間を媒介する」からである (Mollenhauer 1983: 59=66、cf. 今井 2012: 208)。この直観的な表象により、子供たちは抽象的な理念や秩序を、自分たちの日常的な経験と結びつけて学ぶことができるのである。

今井は、このように理念や秩序と感性的知覚を媒介するメディアの働きに着目し、「表象の直観可能性をいかに確保するか」というこの媒介のメカニズムについての問いに応答した思想家としてベンヤミンを解釈する。その際に手がかりとされるのは、『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判的序説」における次の一節である。そこでベンヤミンは、理念はいかにして現象に到達するのか、つまり理念がいかにして我々に現れるのかという問いを立て、次のように続ける。

そしてそれにはこう答えることができる——諸現象の表象＝代表的提示 [Repräsentation] によって。[……] 理念の課題が意味しているものを、ある比喻によって言い表せるかもしれない。すなわち、理念は諸事物に対して、星座 [Sternbilder] がそれぞれの星 [Sternen] に対して関わるのと同じような仕方に関わるのだ、と。この比喻が何よりもまず語っているのは、理念とは諸事物の概念でもなければ諸事物の法則でもない、ということである。[……] 理念とは永遠不変の星座＝布置 [Konstellationen] なのであり、[その理念の] 諸構成要素がこのような星座＝布置のなかの諸々の点として捉えられることによって、諸現象は分割されると同時に救済されるのだ。(GS1: 214f.=上: 32f.; cf. 今井 2012: 210)

今井の解釈はこうである。このように「星座」として表象を捉えた場合には、「個々の現象の直

観可能性は、概念や法則（カッシーラーの言う「科学的記号体系」）におけるのとは違って、表象において捨象されることはない」（今井 2012: 210）。つまり、「表象は何らかの抽象によって実現されるのではなく、具体的な現象をその具体性のままで星座へと配置することによって実現される」のだと（ibid.）。

しかし、果たしてベンヤミンの意図は、理念的なものと感性的知覚を媒介するという点にあったのだろうか。青年期のベンヤミンは、理念が現実世界の感性的・経験的な認識によって曇らされることを強く警戒していたし、そうした姿勢は、その後もカント論（1917/18）における「経験的意識」に対する批判といった形で引き継がれている（GS2: 161）。そうだとすれば、上の引用で言われている「諸現象」とは、我々が感性的直観を通じて見ているような諸現象とは異なるのではないか。実際に、「認識批判的序説」では、星座のなかの諸々の点として捉えられる「諸構成要素」は、感性的直観によって知覚されたものというよりは「概念」によって分割解体されたものだと言われており（GS1: 213f.=上: 30f.）、目の前の感性的知覚がそのまま媒介されるのではないことは明らかである。つまり、ベンヤミンの星座＝布置についての構想は、たしかに今井の言うように理念と具体的な現実を架橋するという教育学的機能をもつものの、そのためには、直観を通じた感性的・経験的な知覚を概念によって分割解体し、「その偽りの統一を放棄」する必要があるのだ（GS1: 213=上: 30）。ここに、理念を経験的・個体的な感性的知覚による歪曲から守りつつもなおその具体性を損なわないようにするという青年期以来の困難な課題が浮かび上がる。

しかし、このような構想が成り立つためには、少なくとも、個体的・感性的な知覚こそが具体的であり概念的に捉えられたものは抽象的であるという一般的な通念を打破して、概念により捉えられたものが具体的であるということを前提として示さなければならない。そして実のところ、ベンヤミンは『ドイツ悲劇の根源』の執筆に先立ってこのような課題に取り組んでおり、その道標を与えたのが——先ほどは退けられていた——カッシーラーおよびフッサール現象学だったのである。以下ではこの見落とされがちな影響関係について精査することにより、「星座＝布置としての理念」がもつ反経験論的な側面を明らかにしてゆきたい。

3. 概念形成理論への着目——1910年代後半のベンヤミンと同時代の思想

前節の最後でも確認したように、ベンヤミンは、理念を個体的な感性的知覚による歪曲から守りつつもその具体性を損なわないようにするという困難な道を進むにあたり、カッシーラーおよびフッサール現象学派の先導を受けていた。カッシーラーを含む新カント学派やフッサール現象学派は、当時の哲学界を席卷していた心理学主義や経験論に対抗して、普遍ないし理念と呼ばれるものを感性的・経験的なものからは独立した論理で考察する試みを行なっている³。このような議論は、純粋な理念を経験的な現実世界の関心によって曇らせることなく見ようとする青年運動期の自身の課題を、ベンヤミンが哲学的な水準で引き続き探求することを可能にするものであった。本節では、しばしば見落とされがちなその影響関係を確認するために、ベンヤミンが参照していたと思われるカッシーラー『実体概念と関数概念』（1910）と1915～1918年ごろにかけて『カント研究〔Kant-Studien〕』誌上で繰り広げられたリンケ・エルゼンハンス論争におけるパウル・リンケの論文「現象学の権利」（1917）を取り上げ、そのなかでも特にベ

ンヤミンへの強い影響が見られる概念形成をめぐる論点について整理する。

3-1. カッシーラーからの影響——実体に対する機能（＝関数）の優位

カッシーラーからの影響を確認するに先立ち、前節で引用した『シンボル形式の哲学』(1923)の一節の後半部分を、今井の引用では省略されていた箇所も含めてもう一度引用することから始めたい。それにより、さきほどは見えなかった（ベンヤミンと共通する）カッシーラーの関心が明らかになる。（先ほど省略されていた箇所を下線部で示す。傍点は引用者による。）

特定の元素〔＝物質 **Stoff**〕を示すものとして用いられている抽象的な「化学式」は、直接の観察や感性的知覚がその元素〔＝物質〕についてわれわれに教えてくれるようなものはもはや少しも含んでいない。〔……〕化学式はもはや物体を、それが感性にとつてなん「である」か、それがわれわれに直接的・感性的にはどのようなものとして与えられるかという観点から示すのではなく、その物体を、一般的法則で規定されている可能的「反応」、可能的因果関係の総体として捉えるのである（Cassirer 1923: 44f.=85f.、邦訳を一部修正）。

つまり問題は、抽象的な「化学式」に代表される「科学的記号体系」に直観性や具体性が備わっているか欠けているかどうかということではない。カッシーラーが言おうとしたのは、そうした「化学式」が、現実世界のなかで我々がその物質について得る個体的で感性的な知覚をもとに形成されているわけでないということなのである。例を挙げるなら、 H_2O という「化学式」は、「冷たい」「液体」「透明」などといった「水」に関して我々に与えられた感性的・直観的な経験との模写的な関係によって意味を持っているのではなく、それが H_2 や O_2 といった他の様々な物質と織り成す化学的な機能連関の総体に対する関係のなかではじめて規定され意味を持つ、ということである。もちろん、我々が経験する「水」の「液体」的な性質についても捨象されるわけではなく、それはそれで「物理的」な機能連関のなかで意味を与えられるであろうし、また、「透明」で透き通った水が「芸術的」な機能連関のなかで意味を与えられることもある（cf. 43=83）。重要なのは、この具体的な意味経験の根拠が感性的・直観的な素材やその背後に想定された究極的な実体（Substanz）のうちにあるのではなく、それぞれの機能連関の方にあるということなのだ。しかも、この機能連関に注意を向けることは、目の前の現実を無視することではない。むしろ、これらの様々な機能連関への注目によって浮かび上がる『「イメージ」の世界〔Welt der “Bilder”〕』（Cassirer 1923 :47=89）を通じてこそ、我々はその「現実」を、豊かで多次的なものとして経験することが可能になる。

ところで、前段落の最後に示した多次的な経験を可能にする表象というイメージは、実のところ、今井がカッシーラーに対立させつつベンヤミンやモレンハウアーのうちに読み取った「直観的な表象」に非常に近いものに見える。実際に、ベンヤミンとカッシーラーについては、直観的なものと精神的・理念的なものとを媒介する「媒質」に着目することで「経験の多次元性」の確保を試みるという共通するモチーフが両者の間にある、と指摘する森田團の研究なども存在する（森田 2011: 55）。しかし、ここで重要なのは、何がその「経験の多次元性」や豊かさを可能にしているかという点である。カッシーラー評価に関しては対照的な今井と森田では

あるが、両者ともメディア論（媒質論）を標榜し、直観と理念の媒介という観点からその豊かさを説明する点では共通している。だが、こうした解釈は、前節でも述べた通り、理念を感性的・直観的な経験から純化しようとするベンヤミンの志向に反するばかりか、実体（Substanz）の感性的直観ではなく、関数＝機能（Funktion）の連関を根源的なものとする前段落で見たカッシーラーの構想の意味も十分に説明できない。以下では、ベンヤミンとカッシーラーをつなぐ論点、理念と直観の媒介というよりは、感性的直観に対する批判の構想の方にあつたことを思想史的な影響関係にも着目しながら示してゆく。

思想史的な関係に目を向けるなら、カッシーラーのこの構想はすでに1910年の『実体概念と関数概念』において打ち出されており、その影響は、1915年前後のベンヤミンの著作にも具体的な形で見ることができる。先行研究でも指摘されている通り、「フリードリヒ・ヘルダーリンの二つの詩作品」（1914/15）でベンヤミンは、カッシーラーのこの構想に依拠しつつ、ヘルダーリンの二つの抒情詩の詳細な注釈を行なった（cf. Speth 1991: 27ff.、Fenves 2011: 18ff.）。ここでその詳細に言及することはしないが、ベンヤミンはこの構想に基づき、抒情詩を、詩人が自身の「心理状態」（という実体）についての直観内容を曖昧に再現したものとしてではなく、そうした心理状態そのものに先行してそれを理解可能なものにする内的な「構造」（機能連関）を表現したものとして捉え直している（この解釈については特に Fenves 2011: 21 を参照）。だが、そもそもカッシーラー（やベンヤミン）は、何のために表象や概念を、感性的・直観的な素材の模写として捉えるのではなく機能連関によって基礎づけようとしたのだろうか⁴。

この動機に関する問いに答えるにあたって本稿が着目するのは、『実体概念と関数概念』で行なわれた伝統的な概念形成理論に対する批判、なかでも経験論の連合説に見られるような抽象化理論——それは当時の心理学の前提となっていた——に対する批判である。その抽象化理論の例として挙げられるのは、例えば「濃密化〔Verdichtung〕」理論である。それによれば、類似した要素をもつ知覚が次々と現れてくることによりそれらの要素間の差異が薄れて漠然とした背景となり、その背景から「恒常的な諸特徴」がひととき明瞭に浮き上がってくる。そしてそれらの恒常的な諸特徴が「濃密化」し、単一不可分な全体へと融合することで概念が形成されるのだという（Cassirer 1910: 14=12）。しかし、概念をこのように「記憶的残留物の総体」（ibid.）として捉える場合、次のような逆説的な事態が生じることになる。

〔伝統的な概念形成論によれば、〕すべての概念形成は、個的な直観のかわりに概略的な全体像を置き、現実の知覚のかわりにその不完全で漠然とした残存物を置くことから始まる。

〔しかし〕このような見解に固執するならば、我々が所与の直観に対して行なうすべての論理的作業は、その所与の直観から我々をただ一層遠ざけることにしか役立たない、という奇妙な結論が導き出されることになる。我々はその所与の直観の内実や構造をより深く捉えるのではなく、個別の事例に固有の特徴がすべて見失われた表層的な図式に達するにすぎない、ということになってしまうのだ。（24=21）

つまり、何らかの事物や実体についての感性的直観に含まれる諸要素を抽出することで概念が形成されると考えた場合、対象をより規定的かつ明確に捉えようとする概念的活動が、実のと

ころ当初の対象よりも無規定で漠然とした図式を生み出すものでしかないことになってしまうのだ。しかし、これは実情に合わない。それに対してカッシーラーが取り上げるのは、「点や線や面」といった幾何学概念（15=13）や「数学公式」のような普遍的規則（25=22）である。例えば幾何学的な「線」は、（幅のない線が自然界に存在しえないという意味で）感性的に直観されることなどありえないし、自然界の様々な可感的な線を比較・分類して抽出された特徴などではない。また二次曲線の数学的公式も、様々な図形の感性的知覚から直接的に抽出されたものではない。しかしそれは、円や楕円という特殊な幾何学的形象を導き出したり、それを他の（例えば数学的・物理学的な）諸問題との関連で体系的に示したりすることを可能にする（ibid.）。「ここでは普遍的な概念が、同時により内容的にも豊かな概念であることが分かる」（ibid.）。

理念的・普遍的なものの方が個体的・感性的な知覚より豊かであるという以上のような思考は、青年期以来のベンヤミンの思考にも馴染むものであった。そしてその思考は、1915年にミュンヘン大学でモーリッツ・ガイガーの演習に参加して以来ベンヤミンの関心を強く引き付けるようになった現象学についての研究⁵と結びつきながら、さらに深められてゆくことになる。

3-2. リンケ - エルゼンハンス論争——非経験的な所与としての理念は可能か

理念的なものが個体的・感性的なものから独立した地位を持つという考えは、前項の最後で述べた通り、現象学の議論との関係のなかでより明示的に探究されることとなるが、その直接の契機となったのは『カント研究』誌上で繰り広げられたリンケ - エルゼンハンス論争であった。これは、フッサールが『イデーン I』で打ち出した「本質直観」という方法の問題を論難するエルゼンハンスの論文「現象学、心理学、認識論」（20 卷 [1915 年] に掲載）に対して、リンケが「現象学の権利 [正当性] ——Th・エルゼンハンスとの論争」（21 卷 [1917 年 1 月] に掲載）でフッサールを擁護し、そして「現象学と経験 [Empirie]」（22 卷 [1918 年] に掲載）でエルゼンハンスがリンケに再反論する形で行なわれたものである。もっとも、フッサールの直系の弟子ではないリンケの議論は、当時のフッサールの助手であったエディト・シュタインがフッサールとの共著論文の草稿で冷淡に指摘しているように、必ずしもフッサールの方法に忠実なものとは言えなかった（Husserl & Stein 1917: 226）。しかし、「理念的で普遍的なものは個体的なものからは理解されえない」（Linke 1917: 189）という主張を、抽象化理論の問題を指摘するカッシーラーの『実体概念と関数概念』の一節——前項で引用した一節——も援用しつつ行なうリンケの議論⁶は、ベンヤミンに強い印象を与えたようである。1918 年 9 月付のショーレム宛書簡で、エルゼンハンスの現象学批判を「無理解な」ものと退ける一方で、「リンケは、ぼくの知るところでは現象学サークルのなかであまり評価されていないが、ぼくは彼のある論文のおかげで現象学の本質ないし彼がそう見なしているものについて幾ばくかのことを教えられた」、とリンケの論文を高く評価している（GB1: 380）⁷。実際に、ベンヤミンはリンケの論文に触発されてそれに応答する短い論考「エイドスと概念」（1917）を執筆している。以下では、この「エイドスと概念」に関連する部分を中心に、この論争の概略を確認していきたい⁸。

論理学は心理学の一部であるという心理学主義の立場を標榜してきた——そしてフッサールの批判を浴びてきた——エルゼンハンスは、1915 年の論文で、フッサールの『イデーン I』における本質直観という構想を批判する。フッサールは現象学の役割を、本質直観により無媒介

に与えられた本質連関を記述することと主張し、それが「いかなる経験的な確言からも独立して遂行される」と主張するが、「そんなことは不可能ではないか」(Elsenhans 1915: 241)。そうした記述には「経験的な知識」(242) ないしは「経験的な観察や比較」(244) が必ず影響しているはずである。これが批判の骨子である。つまり、「現象学においては『所与の状態 [Gegebenheiten]』の把握が問題になっている」という主張と「それでいてこの〔把握の〕手続きがいかなる経験からも引きはがされていなければならない」という主張を同時にしてしまうところに、現象学の一番の弱点がある、という批判である (236)。エルゼンハンスからすると、「所与」とは——彼はカントが「物自体」のような超越的対象の知的直観を否定していたことをその根拠に挙げる——たとえそれがア・プリオリなものだとしても、人間には経験的・心理学的に確証されるしかないものなのである (cf. Elsenhans 1915: 229; Elsenhans 1918: 245f.)。

一方、それに対してリンケは、むしろこの二つの主張を同時に要求する点こそが、現象学「最大の強み」なのだと反論する (Linke 1917: 167)。つまり、現象学は——経験諸科学とは異なり——「現実的な世界の一部 [……] や実在的な事実としての所与ではなく、非実在的で理念的な (フッサールの意味で「形相的な [eidetisch]」) ものとして考えられるような所与」を問題にしているが、「実在的な事実へと方向づけられた態度」は、そうした形相的な次元を覆い隠してしまうというのである (170)。世界内の対象を規定するためには、それによって規定を行なう規定手段——例えば概念——についての知識が必要であるが、その知識は経験から抽出されるのではなく、それ自体として「出会われる」ないし「与えられている」ものでなければならない (169)。それをリンケは非経験的な所与ないし「形相的な」所与と呼ぶ。しかし、なぜそれは「所与」と言えるのだろうか。

この点を説明するために、リンケは、「経験的・個別的なものが何らかの仕方では様させられたもの」として普遍的なものを捉えようとする「誤った経験論的抽象化理論」の批判を行なう (178)。というのも彼によれば、この誤った理論の前提にあるものこそが、エルゼンハンスのような人が「非経験的な所与」としての概念や理念の性格に着目することを困難にし、ひいては「現象学に立ち入る道を閉ざ」している元凶だからである (178)。

リンケは「曖昧化理論 [Verschwommenheitstheorie]」、「濃密化理論 [Verdichtungstheorie]」、「注意理論 [Theorie der Aufmerksamkeit]」という三つの抽象化理論を取り上げ、そのそれぞれの問題点を指摘するが、それぞれの理論の内容については先のカッシーラーの項で取り上げた「濃密化」理論のバリエーションでしかないため本項では省略する。しかしその問題点に関しては、普遍的な概念ほど無規定になってしまうというカッシーラーが指摘した逆説——前節で引用した一節をリンケも引用している——に加え、新たな論点が提出されている。例えば「注意理論」は、同種の個体に典型的な特徴に注意を向けてその特徴の総体を概念とみなす理論であるが、「〔幾つもの個体に共通する〕特定の特徵に排他的な注意を払ったところで、その注意が向けられているものの個性性が廃棄されるわけではない」、つまり普遍化が起こるわけではないという問題である (183)。

逆に我々は、幾つもの個体に共通する性質に注目するとき、その性質一般をすでに前提としている。例えば、ある個体を見て「赤いバラ」と言ったとき、その「赤」という性質それ自体は個体的ではなく普遍的・理念的なものであり、個体的なバラから抽出されたものではないの

だ。このことをリンケは次のさらに極端な例によって示す。つまり、「たった今私が使った吸取り紙の表面に私が見ているこの特定の赤の色調」(184)という例である。我々はこの表現のうちに、いかなる普遍的なものとも対立するもの——つまり「事実的なもの」ないし「単独的・個体的なもの〔das Singulär-Individuelle〕」——の典型例を見たくなるが、リンケによれば、それは「危険な過ち」である (ibid.)。たしかに、今ここにある吸取り紙に付属する性質として経験された赤——つまり、この吸取り紙を燃やすと一緒に消えてしまうような一回的なものとして経験された赤——といったものなら考えられるかもしれない。ただし、「この特定の赤の色調」そのものは、その赤い吸取り紙の運命とは無関係に、例えば隣に並べられた吸取り紙や別の機会に見た吸取り紙の表面に認めたりすることができる。また、たとえその吸取り紙を燃やしたとしても「この特定の赤の色調」そのものは何の影響も受けることなく残りつづける (cf. 185)。さらに言えば、たとえ「この特定の赤の色調」が「幻覚」(cf. 194ff.) であり現実世界では再現することができない色調だったとしても、その赤の色調そのもの(つまりその赤の色調の本質)が——形相的に——与えられていることに変わりはない。そうだとすれば、様々な異なる色調の赤を単独的・個体的なものとして誤って——見なし、そこから曖昧化や平均化、典型化によって抽象されたものを「普遍」として扱う抽象化理論は、出発点から普遍を捉え損なっており、(例えば現実世界で目にしやすいものを特権化するなど) 偶然的で経験的な条件に基づいて普遍や理念を歪曲してしまう。このような事態を防ぐためにも、現象学は、「非個体的でそれゆえ非経験的なものの特別な領域を浮き上がらせ」ようとするのである (196)。

4. 「エイドスと概念」から『ドイツ悲劇の根源』へ

前節では、理念を個体的な感性的知覚による歪曲から守りつつもその具体性を損なわないようにするという困難な道を模索するベンヤミンに指針を与えることになったカッシーラーおよびリンケの議論を確認した。特にベンヤミンが高く評価していたリンケは、感性的直観によって与えられる経験的な所与とは異なる形相的な所与を認めると同時に、それが形相的な直観によって看取されると主張することにより、上の困難な問題に一つの解決を与えた。しかし教育の場面を想定したとき、一つの疑問が生じる。例えば、ある赤い吸取り紙を前にしたとき、我々はそこに赤い吸取り紙の普遍的な本質を看取することが可能である反面、同時にそれを目の前の一回的なものとしても経験している。もし形相的直観によりあらゆる経験的条件を度外視して本質や理念が与えられるのだとすれば、その目の前の特定の赤い吸取り紙を指し示しながらその赤い吸取り紙の本質を教えるような場面において、それが実際に指し示される際の単独的・事実的な状況は取るに足らないということになる。だが、そうだとすれば、現実世界のうちで行なわれる教育という営みそのものが無意味なものとなさないうだろうか。

『ドイツ悲劇の根源』の序説における「星座＝布置としての理念」という構想は、理念(本質)を所与と捉える点ではリンケを継承し、理念の非経験性を主張する一方で、形相的直観という構想とは異なり、本質ないし理念の叙述においては我々の目の前の対象が置かれている歴史的状況や単独性が一定の役割を果たしていることを強調する。以下ではまず、リンケの論文への応答として書かれたベンヤミンの論考「エイドスと概念」において、彼が概念を本質(理念)から区別してそこに単独的な対象を捉えるという役割を割り当てていたことを指摘したう

えて、その概念によって捉えられた単独的な現象が、理念を叙述する際にも不可欠な役割を担っていることを『ドイツ悲劇の根源』の序説の記述をもとに明らかにする。

4-1. 「エイドスと概念」——単独的・事実的な対象を捉える概念

「エイドスと概念」は、普遍や理念を個物から説明しようとする抽象化理論の問題設定自体の誤りをめぐるリンケの指摘には賛同しつつもその手段を疑問視する次の一文で始まる。

P・F・リンケは、概念の抽象化理論が偽問題〔Scheinproblem〕の解決策であるということ、形相的対象が無媒介的に所与であると示すことにより証明しようとする。しかし、概念と本質とが決して同じものではない、ということが表明されていない——そして、おそらくのところ、そもそも明確に見て取られてもいない。(GS6: 29)

つまり、感性的・個体的な所与とは別に「赤」そのものという形相的所与が無媒介に与えられるのだから概念の抽象化理論などそもそも必要ないはずだとリンケは批判するのだが、そのときリンケは形相的所与としての「本質」と「概念」を同一視している。しかしそれらが別物であるのだとすれば、抽象化理論は誤りだとしても「相変わらず概念の理論というものは不可欠」(GS6: 30)ではないか。これがベンヤミンの異議申し立てである。だが、なぜ「本質」と「概念」を分ける必要があるのか。

それを示すためにベンヤミンが持ち出すのは、リンケが提出したさきほどの赤い吸取り紙の例である。前節で確認したのと同様に、「私が〔……〕目の前にあるこの赤い吸取り紙のエイドス〔＝本質〕をありありと思ひ浮かべる」とき、「この吸取り紙が必ずそのつど見いだされねばならない地点や時点が《現実のもの》かどうかは非本質的であり、度外視され、還元を申し渡されている」(GS6: 30)。したがって、個体的な経験は問題になりようがない。しかし、ベンヤミンによれば、概念の場合には事情が異なる。「この吸取り紙が現実空間のある場所、現実時間のあるまとまりのうちで現実存在しているということは、この概念にとって本質的である、すなわち、そのことはその概念の内容に共属していることなのである」(GS6: 30)。ベンヤミンによれば、これは「概念と本質の間の唯一の相違点」なのだという (GS6: 31)。

したがって、例えば「目の前にある赤い吸取り紙」のエイドスは、「その吸取り紙が現実存在する単独的・事実に特定されたある場所」についてはなんら参照しておらず、ただ単に「形相的に《特定された場所》」を示すものでしかない (GS6: 30)。それゆえ用語法においても、単独的な事実規定ではなく形相的な規定を示しているにすぎないことを示すために、《》という「引用符」(GS6: 30) が用いられる。それに対して、概念とは、特定の「この対象『についての』〔von〕」ものである (GS6: 31)。それゆえ「目の前にある赤い吸取り紙」という対象の概念は、そうした形相的な規定だけでなく、まさに「その吸取り紙が現実存在する単独的・事実に特定されたある場所」をも参照している (GS6: 30)。「しかし〔リンケのように〕、この概念の内容をそれにもかかわらず本質として要求し《単独的・事実に特定された場所》という規定全体を引用符の中に入れることで身を守ろうとするなら——その場合、その引用符のなかには何か不合理なもの〔Widersinniges＝反意味的なもの〕、形相的に不合理なものが存在すること

になる」(GS6:30)。つまり、「《単独的・事実に特定されたある場所に現実存在する》赤い吸取り紙」の概念などというものは、もはや単独的・事実に参照する概念であることをやめるか、さもなければ形相的な本質規定を示すはずの《》の中に単独的・事実にものを紛れ込ませてしまう。

以上の議論を踏まえてベンヤミンは、(リンケが提出するような本質についての理論を補完するような)「概念の理論」が不可欠であると主張する(GS6:30)。それにより上のような混同を回避し、理念をより純粋に捉えることが可能になるのである。一方、その概念理論においては「概念の『普遍性[Allgemeinheit]』」はもはや以前ほど重要な役割を果たさないとされている(GS6:31)。彼は「概念の理論」に、単独的・事実に諸対象から平均的な一般性を抽出しようとする経験論的な抽象化理論とは対照的に、単独的・事実にものも含めた対象をそのものとして捉えるという新たな役割を割り当てたのであった。

4-2. 星座＝布置としての理念——理念はいかに具体的な形で示されるのか

以上のように、ベンヤミンは、理念を感性的・個体的経験によって歪められることのない「所与」として捉えるリンケに賛同しつつも、それを形相的直観により一挙に把握することができるという考えには反対し、現象学の形相的な本質理論は概念の理論によって補完される必要があると考えたのであった。もっとも、その後の彼が十全な概念理論の構築へと進むことはなかった。しかしその主張は、まさに第二節で取り上げた『ドイツ悲劇の根源』の「認識批判的序説」において、「理念[＝本質]は、それ自身においてではなく、ただひとえに、事物的な諸構成要素の概念における分類を通してのみ現れ出る」(GS1:214=上:31)という命題によって再演されることになる。ここで、第二節で引用した一節の後半部分を再び引用しよう。

理念とは永遠不変の星座＝布置[Konstellationen]なのであり、[その理念の]諸構成要素がこのような星座＝布置のなかの諸々の点として捉えられることによって、諸現象は分割されると同時に救済されるのだ。(GS1:214f=上:32f.)

第二節では、この「星座＝布置」を理念と感覚知覚を媒介するメディアとして捉える今井康雄の解釈に対して、理念へと媒介される具体的な現実とは、直観を通じた感性的・経験的な知覚ではなくそれらが概念により分割解体されたものであると指摘した。「諸々の現象は、仮象が混じり込んだ粗雑で経験的な状態のまままるごと理念界に入ってゆくのではなく、それらの[概念によって分割された]諸構成要素においてのみ、救出されて、理念界に参入する」のである(GS1:213=上:30)。一方、それと同時に、概念により捉えられた現象が具象性を保ちうるのかという問題も浮かび上がった。「エイドスと概念」で提起された単独的な対象を捉える概念という考えはそれに対する応答になっており、実際に「認識批判的序説」でもその考えは引き継がれている。つまり、概念が諸現象から解き放つとされる「諸構成要素」は「極端なものにおいてこそ最も精確で顕わなもの」となるのであり、理念はそうした「一回的で極端なものが同様のものと結ぶ連関のその形姿として明確な輪郭を与えられるのである」(GS1:215=上:33)。こうして理念の普遍性は、抽象的で「平均的なもの」とは明確に異なる具象的なものとして示さ

れることになる (GS1: 215=上: 34)。

5. むすびに代えて

以上により、理念的なものが感性的な経験によって歪められることなくいかに具体的な形で示され教えられるのかという本論の冒頭で掲げられた問いに対して、ベンヤミンの初期の概念理論の立場から応答がなされた。彼は、理念が個体的な感覚知覚から抽象化された平均的なものなどではなくそれ自体において自律した所与であることを現象学派などの議論を通じて示す一方で、そうした理念が示されるためには概念により現象の偽りの統一を解体し、そのなかに隠された極端なものの連関を浮かび上がらせる必要があると指摘する。ベンヤミンの「星座＝布置としての理念」の構想をこのように読み解いたとき、この構想の教育学的意義は、たんに理念を我々の現実認識に媒介してくれるという点にとどまらないということが明らかになる。その構想は、我々が目の前にしていながら通常の平均化された目によっては捉えることのできなかった現実——つまり極端なもの——に光を当ててその意味を浮かび上がらせてくれるという、理念の教育それ自体がもつ教育学的な重要性をも明らかにしてくれるのだ。

註

¹ このようなベンヤミンの態度は、彼に近い立場にいる人にとってすら理解しがたく見えていたようである。例えば、同じヴィネケン派に所属していた友人であるヘルベルト・ベルモーレはある回想のなかで、「ベンヤミンは、本能と感情を奪われてはいないものの、生と活動を知性を通じてのみ受け取ることを選んでいた」という意味を込めて、かつて知人の女性が「あの愚かなベンヤミンさん」と呼んでいたというエピソードを紹介している (Belmore 1962: 309)。このエピソードについては、小林 2015: 47 も参照。

² 例えば『ドイツ・ロマン主義における芸術批評の概念』(1919)の以下の頁を参照 (GS1: 90)。

³ 世紀転換期のドイツでは、ヴントに代表される実験心理学が興隆し、シュトゥンプフやリップスのように認識論や論理学などの哲学研究を心理学によって基礎づけようとする試みが影響力を持っていた。目覚ましい発展を遂げていた心理学や生理学などの経験諸科学による基礎づけを求める動きは、哲学分野だけでなく、教育学も含めた学問全体に見られる傾向であった。そうした傾向に対抗して、いかなる感性的な経験をも含まない純粋な思考、ア・プリオリな法則によって哲学の基礎づけを試みたのが、カッシーラーを含む新カント派 (特にコーヘンに代表されるマールブルク学派) である。また、『論理学研究』以来のフッサールも、こうした経験論的な傾向を「心理学主義」や「自然主義」と批判し、自身への支持者とともに現象学派を形成しつつ形相的 (eidetisch) な学問の構築を目指した。

⁴ 例えばシュベート (Speth 1991) は具体的な記述に基づき両者の影響関係を詳細に検討している一方で、なぜベンヤミンがカッシーラーの議論を援用したのかという動機に関する検討が不足している。

⁵ 例えば、1915年12月4日付フリッツ・ラート宛の書簡 (GB1: 301f.) を参照。

⁶ ビーター・フェンヴズによれば、1916年頃のものと思われるベルリンのベンヤミン・アルヒーフ所蔵の未出版の読書リスト (MS 506) には、「概念をめぐる『カント研究』誌におけるリンケ・エルゼンハンス論争」というメモ書きとともに、カッシーラーの『実体概念と関数概念』やフッサールの『論理学研究』、『イデーン I』などの書名がリストアップされているのだという (Fenves 2011: 48, 263f.)。この指摘は、リンケ論文におけるカッシーラーの引用にベンヤミンが注意を払っていたこと、また、この論争への取り組みが、以前から読んでいたと思われるカッシーラーへの取り組みの延長線上で行なわれていたことを示唆しているとも言えるだろう。

⁷ また、同年12月23日付のショーレム宛書簡でも、「リンケの名声はぼくの知るところ厳密な現象学派のなかでは大きなものではないが、もちろんそんなことには何の意味もない」と言っている (GB1: 410)。

⁸ この論争を整理する上で、リンケやエルゼンハンス、ナトルプなど同時期の哲学者による現象学関連の論文が収められた英訳アンソロジーである Andrea Staiti, Evan Clarke (Eds.) *The Sources of Husserl's "Ideas I"*, 2019, Walter de Gruyter GmbH, Berlin/Boston を参考にした。

文献

ベンヤミンの著作については、略号の後に巻数、参照頁数を記載し、それ以外の著作は、著者、出版年、参照頁数の順に記載する。また、既訳があるものについては、等号の後に既訳の頁数を記載した。引用にあたっては、特に断りがない場合、既訳を参照の上、引用者が訳出している。

【ベンヤミンの著作】

GS: Benjamin, Walter (1974ff.) *Gesammelte Schriften*, herausgegeben von Rolf Tiedemann und Hermann Schweppenhäuser, 7 Bände (Suhrkamp, Frankfurt a. M.).

GB: Benjamin, Walter (1955ff.) *Gesammelte Briefe*, herausgegeben vom Theodor-W.-Adorno-Archiv. Christoph Gösde und Henri Lonitz, 6 Bände (Suhrkamp, Frankfurt a. M.).

上: ベンヤミン、ヴァルター (1999) 『ドイツ悲劇の根源 上』(浅井健二郎訳) 筑摩書房。

【それ以外の著作】

Belmore, H. W. (1962) Walter Benjamin, in: *German Life & Letters: A Quarterly Review* 15, 309-312.

Cassirer, Ernst (1910) *Substanzbegriff und Funktionsbegriff: Untersuchungen über die Grundfragen der Erkenntniskritik* (Berlin: Verlag von Bruno Cassirer)=山本義隆訳 (1979) 『実体概念と関数概念 認識批判の基本的諸問題の研究』みすず書房。

Cassirer, Ernst (1923) *Die Philosophie der Symbolischen Formen, Erster Teil: Die Sprache* (Berlin: Bruno Cassirer Verlag)=生松敬三、木田元訳 (1989) 『シンボル形式の哲学 (一) 第一巻 言語』岩波書店。

Elsenhans, Theodor (1912) *Phänomenologie, Psychologie, Erkenntnistheorie*, in: *Kant-Studien* 20, 224-275.

Elsenhans, Theodor (1918) *Phänomenologie und Empirie*, in: *Kant-Studien* 22, 223-261.

Fenves, Peter (2011) *The Messianic Reduction: Walter Benjamin and the Shape of Time* (Stanford, California: Stanford University Press).

Husserl, Edmund & Stein, Edith (1917) *Zur Kritik an Theodor Elsenhans und August Messer* (Edith Steins Ausarbeitung), in: Edmund Husserl (1987) *Aufsätze und Vorträge (1911-1921)*, herausgegeben von H. R. Sepp & T. Nenon, *Husserliana XXV* (Dordrecht: Martinus Nijhoff), 226-248.

今井康雄 (2012) 「表象とメディア——教育学的メディア論のための一考察」、田中毎実編『教育人間学 臨床と超越』東京大学出版会。

小林哲也 (2015) 『ベンヤミンにおける「純化」の思考 「アンファング」から「カール・クラウス」まで』水声社。

Linke, Paul F. (1917) *Das Recht der Phänomenologie. Eine Auseinandersetzung mit Th. Elsenhans*, in: *Kant-Studien* 21, 163-221.

Mollenhauer, Klaus (1983) *Vergessene Zusammenhänge: Über Kultur und Erziehung* (München: Juventa)=今井康雄訳 (1987) 『忘れられた連関 〈教える - 学ぶ〉とは何か』みすず書房。

森田團 (2011) 『ベンヤミン 媒質の哲学』水声社。

Speth, Rudolf (1991) *Wahrheit und Ästhetik: Untersuchungen zum Frühwerk Walter Benjamins* (Würzburg: Königshausen & Neumann).

(臨床教育学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2020 年 8 月 31 日、改稿 2020 年 11 月 10 日、受理 2020 年 12 月 7 日)

理念的なものはいかに教えられるのか

—概念理論をめぐる初期ベンヤミンの現象学研究を手がかりに—

浅井 健介

本稿の目的は、初期のヴァルター・ベンヤミンが新カント派およびフッサール現象学派からの影響のもとに行なった哲学的研究の思想史的な検討を通じて、感性的な経験によって歪めることなく理念を提示するという青年期以来の彼の困難な課題がどのように哲学的に深められていったかを明らかにすることである。これまで彼のこうした非経験論的な側面は、理念的なものと同観的なものの媒介を強調するメディア論的なベンヤミン解釈によって覆い隠される傾向があった。それに対して本稿は、新カント派のエルンスト・カッシーラーや現象学派のパウル・リンケからの影響のもとで独自の概念理論を探究する「エイドスと概念」という遺稿に着目し、それを経験論や心理学主義との対決という当時の思想史的な背景を踏まえつつ読解することで、感性的な経験から切り離された理念がいかにして現実世界のなかで示されるのか、という問題に対する彼の応答を解明する。

How Can We Teach the Ideal? Focusing on Walter Benjamin's Early Phenomenological Studies on the Concept Theory

ASAI Kensuke

Walter Benjamin tackled the difficult question from his youth of how to teach the ideal without contaminating it with empirical intuition. This paper examines how he continued to investigate this question philosophically and epistemologically through his studies on the theories of concept and idea in the late 1910s and early 1920s, which are influenced by neo-Kantianism and early phenomenological circle. His concern with anti-empiricism is often overseen by previous studies on Benjamin, especially those emphasizing his theory of medium, which mediates the idea and intuition. In contrast, this paper focuses on the often-neglected influence of the neo-Kantian philosopher, Ernst Cassirer, and the phenomenologist of the Munich School, Paul F. Linke, on Benjamin, and reads Benjamin's article "Eidos and Concept," an article investigating a unique concept theory responding to Linke, against the historical background of his resistance to empiricism and psychologism. This paper clarifies his response to the question of how ideas dissociated from empirical intuition can still be represented in the real world.

キーワード： ヴァルター・ベンヤミン、パウル・リンケ、現象学、概念理論

Keywords: Walter Benjamin, Paul F. Linke, Phenomenology, theory of concept